

もいいことに思える。

この小説はほかの作品に劣るとは思わないが、一つだけ落ちたのは、作者は運命とあきらめ、この運命を逆利用すべきだ。きっとこの作品もこの作者も陽のめを見るだろう。「囚人のうた」は、評判がよくてホッとした終りの方で景気がよくなつて、主人公が浮いてしまつた。これがなければこの作品の意味はほとんどないことになるといふ意見も我が意を得たりだつた。残念ながらそうだ。(このことに当るところは「流れくる日々」にもあるようだと思ふ。かえすがえすも「流れくる日々」がいつしょに読者の前にないのが心のこりだ。別れた女の手紙がありふれていてつまらないといふことだつた。(私は必ずしもそらは思わぬい)

「ブ」は、のびのびしてて、むかしのあいの、サガンみたいだが、もつと今ふうともいえる。もう小説を書くより仕方がない、といふのがちょっと、という意見もあった。私はかがならずしもそうは思わなかつた。読みながら抵抗はあるが、この抵抗はここではいいのではないかとも思えた。私自身はそういうことは、つっこんで考えたくない。その理由はあるが、いいたくない。

選後感

島尾敏雄

今年は七八編が集まつたといふ。その中から最終予選を通過した四編を選んだ。この選り分けこそたいへんな仕事だなどと思ひながら、四編共達者なものだと感じた。作者がいすれも二十代半ばから三十代前半だといふ年齢を考えると、そのことは一層際立つてくれる。或いは若年にして小説技法を斯く心得うる状況が醸成されているのだろうか。殊に二

妻である男とのかかわりと死んだ父親への追憶の心情の吐露を綴つた言葉とでも言えようか。魅力を感じたのは、天衣無縫な構えのよくなものの中にはいは将来性が認められたからであろうか。しかし話が割れていることと、如何にも文体が素朴だと思つたのだ。結局のところ私は四編のうちどの作をでも、支持が集まるようならそれを入選作としてよいという気持になつていいたが、一応この若い二氏の作品は捨てることにして選考会に臨んだのは、以上の読後感と若い世代には理解の届きかねる部分が存したことによる。

十四歳の「最年少である田中順夫の『なんとかく、クリスマス』」の文体の軽快な確かさのとうなものはどこから生まれてくるものか。太学生でモデル・クラブにはいっていいる女を主人公にして、「ブランドに弱い日本人」の中で「有名ブランド」商品ばかりを恰好よく身につけていたる若者の世界が、自在に展開されているのだが、難を言えば、たとえその風俗をさまざまと目にした時に認めざるを得ない貧しさにはやや不感症であるようならず気味悪さが読後に残つた。又二十六歳の中平までの「ストレイ・シープ」には、当世若者言語で書かれた昭和初期風私小説でも読むが如き奇妙な魅力があつた。話の内容は、或るテレビ局アシスタントになつた若い女性の、

の立場で書いている。流行にもセックストンによらんの如く、一流をのぞみ、ゆたかさを望んでいるこの二十歳の女は、もちろん現代風俗そのものだが、むかしの石原慎太郎のことや独歩の『武藏野』のことを何となく考へた。註文の内容は、あんまり上手ではないが、もしもつと満足させるようなものであるとしたら、違つた作風の小説になつていたのであろう。受賞作三つというのは多すぎるが、私はあえてそうしてもらいたいといった。こと私自身にかんしていえば、とくに読み方が上手なわけではない。とくべつ私の眼力によつて選ばれるわけではない。むしろ私はそんなものあまり持ちたくないくらいだ。私は平凡な一読者だ。だからともとを選ばれるべくして選ばれたのだ。もちろんそこまでの編集部の努力は大へんなものだが、私のいいたいのは、読者自身が自分の読み方で読んでくれることを望みたいということだ。それから二つの時代の作品が授賞してよかつた。

三作を同時に推す

江藤淳

いうもの読まなかつた。
そんなわけだつたので、久しう振りに四篇の候補作を読み、二十代、三十代の若い作家たちに、小説を作り上げようとする意志が復活しつつあることを確認したときには、新鮮な喜びがあつた。それは、過去四、五年來衰弱の一途をたどつていたものだが、実は小説の基本である。小説は、私小説といえども丹念に作られている。そのことを忘れたとき、小説の空間は薄汚れた「わたくしどと」に収縮してしまう。今度の候補作中、只の一編もそういう薄汚れた作品がなかつたところを見るに、どうやら若い作家たちは、近頃礼節をわきまえはじめたらしのである。
なかでも田中廉夫氏の「なんとなく、クリスター」は、斬新さという点では四篇中右に出るものがない。気障な片假名名前コラージュのなかに、「ナウイ」女の子を登場させ、しかも、へ惚れ殿御に抱かれり濡れる、惚れぬ男に濡れはせぬ、とでもいへべき古風な情緒で「まとめてみた」点は、まことに才氣煥発、往年の石原慎太郎と庄司薰を足して二で割つた趣がある。後世畏るべしとうほはあるまい。

この小説に付けられた24個の注は、「なんとなく」と「クリスター」とのあいだに、「」を入れたのと同じ作者の批評精神のあらわれで、小説の世界を世代的、地域的の

いうものを読まなかつた。

「囚人のうた」である。文体は四作の中でも一番地味だと言つてもよからう。博多の町で学生生活を送り、卒業して或る造船会社に入社した男のそれらのあと先の生活が繰られて記述される。話の軸となるのは、学生時代に同棲していた女性の自殺死の衝撃である。彼女を追憶することによって彼の過去と現在の生活が展開し、やがてそれまでの受け身の生活を転じて過去に訣別する間際に立ち至つて、決定的な躊躇が暗示されて終結する。しかしその終末の部分は私にはわからなかつた。その所は別にしても、中に書きこまれた一人の若い男の生活が、時の流れをもとらえつ手応えを感じさせるようにならかに書きこんであつた。博多弁もうまく表記されていたと思ふ。

安芸力生（三十一歳）の「流れるくる日々」は実は私の一番気にかかつた作品である。作中に描かれているにんげんの中にはかけりの深い造型的成功してゐた部分があつた。深淵の謎解きのよくな緊張も感じさせられた。しかし全体が甚だ不均衡であつた。不均衡から生ずる面白さも多少は認めた上で（其英國體験者の会話など）、おもろかげぬ不安定と氣味悪さがあつた。しかしこの作品は私のほかには支持がなかつた。結果として一挙に三作が入選になつたのは二十代作者の二作品を惜しむ気持が選考員のあいだにたゆたついていたからと思う。私にも積極的にしりぞける考え方

は起きなかつた。

人生は「囚人のうた」
か、否か
野間 宏

明日の文学、人間、世界を考え、書き、動く

季刊

文藝

7
秋号

A5判
定価=780円

小学館

絶賛発売中

小説

説

特集

特集

文学の破壊と再生

野間

宏

「暗い絵」の根底と
現在の文学状況

聞き手
ブレジット・ド・バリ・二一

(いま注目の才媛 日本近代
文学研究者 コーネル大学)

アドバイザー 小田 実
佐江衆一

埴谷 雄高

戦後文学は
時限爆弾である

「ベトナム戦後」の世界で

小田 実

想像力と土着の事物のもつアーリズム

<特別レポート>

なぜ弱者がだけが公害を受けるのが
重なる声

アメリカ・ニューヨキンコのウラン公害を告発する

「葉をつけて」

瀬戸内 晴美

未完のまま滅ぶた樋口一葉の後をうけ、いま瀬戸内晴美が、この短篇を完結させた。恋に生きたお彼の運命は……。

塩見 鮮一郎

死体について

評論

その四 野間 宏

評

論

山の神

乾 期

ある年のある風景によせて

私にとっての

二十世紀小説

連載④

中村 真一郎

構造と文学

上海 第3回

「上海に生くる人々」と

篠田 浩一郎

観察

和田 長久

高良留美子

水橋 晋

野村 修

観察

観察

和田 長久